

第11章 鳥 人

第I部の最後に、翼を生まれながらに持っているか、あるいは知恵や技術で手に入れた英雄の神話を取り上げる。

1 ペルセウス

伝ヘーシオドス『盾』は、英雄ヘーラクレスが携えている盾の面に描かれた凶像の描写を主題としているが、その中に次のような箇所がある。

そこにはまた、髪美しいダナエーの息子、騎士ペルセウスがいた。その両足は盾に触れてもおらず、離れてもいない。言葉にするには大いなる驚異、支えられているところがないのだから。実にもそのように、ペルセウスを名高き足萎えの神〔ヘーパイストス〕の手がこしらえた。黄金の造りで、両足には翼あるサンダルを履いていた。肩には黒い柄の剣が背負われ、青銅の鞘に入っていた。ペ

ルセウスは心が飛ぶように飛んでいた。他方、背中全体は恐ろしい怪物の頭となっていた。ゴルゴーンであった。そのまわりを走る袋は、見るも驚異、銀の造り。垂れ下がる輝く房は金の造り。そして、ペルセウス王はこめかみをハーデースの見事な皮兜で包んでいたが、これは恐ろしき夜の闇をもたらずもの。

〔盾〕二二六—二二七

ここで、ペルセウスの像がなにも支えられていないというのは、現実にはありえない。しかし、その非現実性は、英雄とはいえ人間が空を飛ぶという驚異と奇妙に符合する。このような「言葉にするには大いなる驚異」、そして、「見るも驚異」を可能にする道具をペルセウスが手に入れた次第は、アポツロドーロスによると、ほぼ次のようである。

アルゴスの王アクリシオスは、娘から生まれた孫によつて殺されるであろうという神託を受けていたため、娘のダナーエを幽閉していた。このダナーエとゼウスが黄金の雨に姿を変えて交わり、生まれたのがペルセウスである。しかし、この母子をアクリシオスは箱に入れて海に流した。箱はセリーポス島に漂着し、ディクテウスという男が拾い上げて、ペルセウスを養育した。成人したペルセウスに、セリーポスの王ポリュデクテースは、ゴルゴーンの首を取ってこい、という使命を課した。これを果たすため、まず、ペルセウスはゴルゴーンらの姉妹であるグライアイのもとへ行つた。彼女らは生まれたときから老婆の三人姉妹で、一つしかない目と歯を順繰りにまわして使っていたが、ペルセウスはこれを取り上げておいてから、返してほしければ、翼あるサンダルと袋とハーデースの皮兜〔袋は衣服と食糧を納め、皮兜はかぶった者を透明にする〕を持つニンフのいる場所を教えよ、と言つた。そうして道順を聞き出し、ニンフのもとで欲するものを手に入れ、さらにヘルメースから金剛の鎌を授かると、ペルセウスは、

四人姉妹のゴルゴーンのうち一人だけ不死ではなかったメドゥーサの首を切った〔ギリシア神話〕二・四・一―二。

オウイディウス〔変身物語〕四・六〇七―五・二四九〕によれば、ペルセウスは、グライアイから得た翼あるサンダルがすこぶる気に入ったらしく、これを使って北から南、東から西へと一度ならず世界中を飛び回った。あるときは西の果てにアトラースの治めるヘスペリアと呼ばれ、黄金の果実を結ぶ木が生える国を訪ねた。しかし、アトラースはその昔、いつかユツピテルの息子が黄金の果実を奪い取りにくる、という神託を聞いていたので、果樹園を大蛇に守らせ、よそ者を領土から閉め出していた。このときもアトラースは、ペルセウスがほんの少し休ませてくれという頼みを断った。それに対して、ペルセウスはメドゥーサの首を突き出して、アトラースを巨大な山に変えてしまったという。以来、アトラースは全天をその肩の上に背負うこととなった。そして、ケーペウス王の治めるエチオピアの上に飛んできたとき、ペルセウスは岩に両腕を縛られている乙女アンドロメデーの姿を見つけることとなった。

軽やかな微風に髪の毛がそよぎ、両眼から熱い涙がこぼれていなかったら、大理石の像とも思っただことであろう。その姿を見るや彼は気づかぬうちに心に恋の火を点し、われを忘れた。目に映った美しさに心を奪われて、あやうく空中で翼を振るのを忘れそうになった。

(同四・六七三―六七七)

地上に降り立ったペルセウスが乙女に事情を尋ねると、彼女の母親にして王妃であるカッシオペイアの傲慢な言葉が原因であることをアンドロメデーは語ったが、そのときすでに海の怪物が大音響とともに迫ってきていた。駆け寄ってきて泣くだけの王と王妃から、ペルセウスはアンドロメデーの命を助け

る褒賞として彼女との結婚の約束を取りつけると、迫りくる怪物に挑みかかった。

若者は両足で大地を蹴ると空高く雲間へ飛び去った。海面に英雄の影だけが映り、映った影に怪物が襲いかかるあいだに、さながらユツピテルの鳥が、開けた耕地の中で青黒い背を太陽に曝している大蛇を見つけるや、背後から取り押さえつつ、狂暴な口を後ろに振り向けないように鱗が覆う首根へ飢えた爪を打ち込む、まさにそのように、虚空を真つ逆さまに急降下するや、怪物の背中を襲い、吠える怪物の右肩へイーナコスイナコスの裔すえなる英雄は三日月型の剣を柄つかまで埋め込んだ。

(同四・七二一—七二〇)

怪物はこうして深手を負ったあとも抵抗を続けたが、ペルセウスはさらに何度も剣を突き刺して退治した。こののち、オウイディウスの語るところでは、アンドロメデーとの婚礼を挙げることとなったが、その祝宴を邪魔する輩が現れたという。怪物の襲来以前にケーペウス王はアンドロメデーを弟のピーネウスに娶めとらせる約束をしていたが、このピーネウスが、怪物に立ち向かう勇氣はなかったのに、いまとなって許嫁を奪われたと言つて、仕返しに祝宴をペルセウスの血で染めようと、大勢の仲間とともに押し寄せた。しかし、ペルセウスは獅子奮迅の活躍を見せて応戦した。その様子をオウイディウスは例のスラップスティック調で長々と叙述したあと、ようやくペルセウスにメドゥーサの首という切り札を出させ、これにより敵をすべて石に変えて勝利を収めさせる。そんな万能兵器があるのなら最初から使えばよいと思うのは、現代のB級映画を見たときの感想と共通しているかもしれない。それはともかく、こうしてペルセウスは、めでたく妻アンドロメデーを連れて故国アルゴスへ戻ったという。

2 カライスとゼーテース

北風の神ボレアースがアテーナイの王女オーレイテュイアをさらつて妻としたことは、きわめてよく知られた物語であつた。古注の一つには次のように記される。

アテーナイ人の王エレクテウスは、オーレイテュイアという名の美しさ絶品の娘をもうける。この娘の身支度を整え、捧げものの籠を持たせてアクロポリスの守護神アテーネーのもとへ遣わす。ところが、この娘に風のボレアースが恋して、監視人たちの気づかぬうちに娘をさらつてしまつた。そして、トラキアへ連れてゆき、自分の妻とする。彼女から生まれた子供がゼーテースとカライスで、徳のゆえに英雄たちとともにコルクスへ羊毛皮を求めてアルゴ―船に乗り航海した。

(古注ホメーロス『オデュッセイア』一四・五三三)

北風のように、双子の息子らも空を飛ぶことができた。その姿をロドスのアポッローニオスは、

二人は足の先の両側で黒い翼を振つて宙に浮いていた。まさに大いなる驚異の眺め。翼は黄金の鱗で輝き、背中のあたりでは、頭頂と首筋より左右に垂れた黒髪がそよ風を受けて揺れていた。

(『アルゴナウティカ』一・二二九―二三三)

と語っている。しかし、彼らの翼についての伝承はさまざまで、ピンダロスは「二人の勇士とも背中に緋色の羽根が生えていた」(『ピューティア祝勝歌』四・一八二―一八三)とする一方、ヒュギーヌスによれば、「ゼーテースとカライスは頭と足に翼が生えていた」(『神話伝説集』一四・一八)ということである。

さて、カライスとゼーテースは、同じくアルゴ船に乗り込んだ英雄ヘーラクレスと仲が悪く、最後には彼に殺されたと言われている。その軋轢には、ヘーラクレスが身の回りの世話をみてもらい、大事にしていたヒュラーズという美少年が関わっていた。アルゴ船がミューシア地方にやってきて碇泊したとき、ヒュラーズはヘーラクレスのために食事とこのを調えるべく水を汲みに森の奥の泉へ向かったが、そこで彼に恋した泉のニンフによって水中に引き込まれてしまった。姿の見えなくなったヒュラーズをヘーラクレスは狂ったようにさがし続けたが、結局、見つけれないまま、アルゴ船からも置き去りにされてしまったという。ヒュラーズが泉に向かったとき、プロペルティウスが歌うところでは、その途中でゼーテースとカライスがちよっかいを出したことになる。

それを二人の兄弟が追った。北風の神ボレアースの子らだ。少年の上からゼーテースが、少年の上からカライスが迫る。両腕を宙に舞わせながら口づけを奪おうとする。また、交互に飛び去りつつ上向きの口づけをしようとす。が、少年は、翼の下で宙に浮くように見えながら、身をすくめ、飛びかかってくる敵勢を木の枝で追い払う。すぐにバンディーオーンの一族、オーレイテユイアの子らは去った。ああ、痛ましや。ヒュラーズが行ってしまう。ニンフたちのもとへ行ってしまう。

〔詩集〕一・二〇・二五―三二

他方、アポッローニオスによれば、アルゴ船の英雄たちはヘーラクレスを乗せないまま出航したことに気づいたとき、最大の勇士を置き去りにしたことで大きな騒ぎと混乱が生じたのち、アイアコスの子テラモーンの叱責によって、船はミューシアへ引き返しそうになった。

だが、トラキア生まれのボレアースの二人の息子がアイアコスの子を激しい言葉で引き止めた。哀れな者どもだ。実に、彼らにはそののち、忌まわしい報いが成就されようとしていた。ヘーラクレスの手にかかったのだ。彼の搜索を引き止めたゆえに、二人は、ペリアース葬送競技から戻る途次、潮が取り巻くテーノス島で殺された。ヘーラクレスは土を盛って彼らのまわりに高く築くと、その上に二本の碑を立てた。そのうちの一本は、見る人の目に大いなる驚異ながら、風音きこを転るボレアースの息によって揺れ動く。だが、これらは時を経てこのとおり成就されるべきことであつた。

〔アルゴナウティカ〕一・二三〇〇—二三〇九

こうしてヘーラクレスを置き去りにしたまま、アルゴ船はコルクスを目指して進み、テューニアへとやってきた。すでに触れたように、ここにはかつてのトラキア王ピルネウスがおり、盲目の身でハルピュイアたちに苦しめられていた。ピルネウスは、ボレアースの二人の息子がハルピュイアたちを追い払ってくれるという予言を受けていたので、彼らにそのことを頼む。二人はピルネウスから、ハルピュイアたちの襲来を止めて自分を助けても神々の好意を失うことはない、という誓言を引き出し、彼を助けようと気が逸つた。ハルピュイアたちをおびき寄せ、食事が用意され、二人が近くに立ち、ピルネウスが手をつけようとしたときだつた。

怪鳥どもが突如、さながら激しい突風か稲妻のように、雲間から不意に急降下するや、狂おしく食べ物を求めて鳴いた。それを見た英雄たちは叫びを上げたが、そのあいだにも怪鳥どもはすべてを食へつくして海上に向かい、遠くへ去ると、そのあとには耐えがたい臭いが残された。怪鳥どものあとを追つてボレアースの二人の息子が剣を振りかざしつつ急いだが、ゼウスが彼らに疲れを知

らぬ力を吹き込んでいた。ゼウスの加勢がなければ追跡はかなわなかつた。怪鳥どもは西からの突風をも追い越したから。いつもそのようにビーネウスのもとへ行き来していたのだつた。さながら、山の肩で狩りにすぐれた犬たちが、角を生やした山羊やのろ鹿を追いかけて走り、ほんのわずか後ろから体を伸ばすが、顎の先端で歯が空しい音を立てたときのよう。そのようにゼーテースとカライスは、すぐ附近に追いつがつて怪鳥どもを指の先に捕まえようとしたが、かなわなかつた。實際、神々の意志に反して八つ裂きにもすべく、はるか遠くプロータイ「海に浮いた」群島のあたりで追いつくところであつたが、敏速のイーリス女神がこれを目に止め、天上の高みより舞い降りた。

(同二・二六七—二八六)

女神が、ゼウスの犬であるハルピュイアを傷つけることは掟に背くことを告げ、もはやハルピュイアどもがビーネウスに近づくことはないと厳肅な誓言を立てたため、ボレアースの二人の息子はそこから引き返した。プロータイは、このことにちなんで、いまではストロパデス(引き返し)群島と呼ばれているという。

3 ダイダロスとイーカロス

クレータ島から脱出するためにダイダロスが翼を作り、息子イーカロスとともに空へ飛び立った物語はよく知られているが、そもそもどうしてダイダロスがクレータへやってきたのか、その経緯はそれほど有名ではないかもしれない。ヒュギーヌスによれば、

ダイダロスはエウパラモスの息子で、ミネルウアから工匠の技を授かつたと言われるが、自分の

妹の息子であるベルディクスの技量を妬んだ。彼が最初に鋸のこぎりを発明したからである。それで彼を屋根のてっぺんから突き落とし、その罪のためにアテーナイから追放され、クレータのミノノース王のもとへ行つた。

〔神話伝説集〕三九

ということだが、オウイディウスによると、十二歳でダイダロスに弟子入りしたベルディクスは、少年でありながら、魚の背骨を手本にして鋭い鉄の歯を並べた鋸を発明したり、二本の鉄製の腕を結び合わせてコンパスを発明したりした。そのため、

ダイダロスは嫉妬して、神聖なるミネルウアの城塞「アクロポリス」から真つ逆さまに突き落とし、滑つて落ちたのだと嘘をついた。だが、才能ある者に好意を示すミネルウア女神が受け止めて鳥に変えた。空中で体を羽毛で覆つた。しかし、それまでの潑刺として機敏な才能は翼と脚に移つた一方で、名前は以前のまま変わらなかつた。それでも、この鳥は自分の体を高く上がらせることをせず、枝の上や高い梢に巢を作ることもしない。地面の近くを飛び回り、生け垣に卵を産む。昔の落下が忘れられず、高いところが怖いからだ。

〔変身物語〕八・二五〇—二五九

名前が変わらなかつたというのは、ベルディクスというギリシア語（および、ラテン語）がヤマウズラの意味なので、少年がこの鳥に変身したことを表している。アリストテレスはヤマウズラを、体が重くよく飛べない鳥とする一方、たとえば、人が雛を見つけて捕まえようとすると、雛は癩癩を起こしたように駆け回つて注意を引き、そのすきに雛を逃がすというような「悪賢い」習性をいくつか観察している（『動物誌』九・八）。そうした習性をオウイディウスの言う「機敏な才能」が指しているのかどうかは

分らないが、ヤマウズラが「よく飛べない鳥」であることは確からしい。とすると、アクロポリスから突き落とされたときに、途中で翼が生えたからといって、落ちる勢いを制御してうまく飛べたとは思像しにくい。だから、「ミネルウア女神が受け止め」なければならなかったのだろうかと思つと同時に、それだけ「昔の落下が忘れられず、高いところが怖い」のも、もつとも思われる。この恐怖の経験から、そののちベルデイクスは、ダイダロスがイーカロスの遺体を埋葬するところを見ていて、翼を打ち合せて拍手し、喜びを歌で表したという。

さて、このベルデイクスの一件でダイダロスは国を追われた。嘘は露見したということであろう。そのあとの物語の大筋をヒュギーヌスによって確認しておこう。

太陽神の娘パーシパエーはミーノースの妻となつたが、ウエヌス女神の祭儀を何年ものあいだ行わなかつた。そのため、ウエヌスは道に背く愛を彼女に吹き込んだ。彼女にはすでにかわいがつていた牝牛があつたが、これに異なる愛し方をするよう仕向けたのである。このとき、国を追われたダイダロスがやつてきて、彼女に救いを求めた。彼が彼女のために木で牝牛をこしらえ、本当の牝牛の皮を着せると、彼女はそれに入つて牝牛と交つた。そこから生まれたのがミーノータウロスで、頭は牛、首から下は人間の姿をしていた。それから、ダイダロスは出口に決して辿り着けない迷宮を作り、その中にミーノータウロスを閉じ込めた、ミーノースはこのことを知ると、ダイダロスを牢に押し込んだが、パーシパエーが彼を縛めから解放した。そこで、ダイダロスは自分と息子イーカロスのために翼を作つて体に装着すると、そこから飛び去つた。イーカロスは高く飛びすぎたために太陽の熱で鐵がとけ、海に落ちた。その海は彼にちなんでイーカロス海と名づけられた。

ダイダロスはシキリア島まで飛んでコーカロス王のもとへ行つた。別伝では、テーセウスが、ミーノータウロスを殺したあとでダイダロスを彼の祖国アテーナイへ連れ帰つた、ともいう。

〔神話伝説集〕四〇

しかし、人間が自分の体につけた翼で自在に空を飛ぶことは夢ではあるが、現実とは考えられないので、翼は「權」の比喩的表現だとする見方もあり、パウサニアースには次のような話が伝えられている。

ダイダロスはクレータから逃げるとき、自分と息子イーカロスのためにそれぞれ小舟を作つた。その当時はまだ使われていなかった帆をつけ、風に乗つて進んだので、ミーノースの權で漕ぐ艦隊は追いつけなかつた。しかし、ダイダロスは助かつたものの、イーカロスは操縦がまずくて船が転覆し、溺死した彼の遺体は潮に流されてサモス沖の名もない島へ漂着した。この遺体をヘーラクレースが見つけて埋葬し、その塚はエーゲ海に突き出した岬に立っている。

〔ギリシア案内記〕九・一一・四一五

こうした見方を意識したものか、オウイデイウスはダイダロスによる翼の製作過程をやや念入りに叙述した。

彼は誰も知らなかつた技術に没頭し、自然を変えようとする。まず、羽根を順番に並べる。小さいほうから始めて、短いものあとにより長いもの、そうして、勾配をつけて大きくした。ちょうど、昔の田舎風葦笛が大きさの少しずつ違ふ葦を並べるようにだ。それから、中央を紐で、最下部

を鐵で止め、こうして組み上げたものをたわめて少し湾曲させ、本当の鳥に似せた。

〔変身物語〕八・一八八—一九五

翼が出来ても、使い方を知らなければ空を飛ぶことはできないが、ダイダロスには心得があつたらしい。

仕事に仕上げの手を施すと、工匠は二つの翼のあいだで体の釣り合いをとつた。羽ばたくことで宙に浮くと、息子にも指示を与える。「中略」飛び方の注意を与えると同時に、両肩に誰も知らなかつた翼を装着してやる。

(同八・二〇〇—二〇三、二〇八—二〇九)

しかし、この「誰も知らなかつた技術」による「誰も知らなかつた翼」がもたらすはずの悲劇は、知らない者がいほど有名である。自分の作つたもので息子を失つたダイダロスの深い悲しみをもつともよく表現したのは、おそらくウエルギリウスであろうと思う。この詩人によれば、ダイダロスは天空を翔る旅から戻ると、クーマエのアポローン神のために壮大な神殿を建て、その扉絵に自身にまつわる物語を描いた。

ここには、牡牛への酷薄な愛、秘め事を通じ身をゆだねたパーシバエー、異種混交により二つの姿をもつて生まれたミーノータウロスが描かれ、ウエヌスの忌まわしき業を思い起こさせる。ここには、かの苦心を尽くした家、解きたい迷路がある。しかし、王女の太いなる愛を憐れんで、ダイダロスみずからが館の奸計と曲折に富む回廊を解き明かした。先が見えぬ足の運びを糸で導いたのだ。イーカロスよ、おまえもまたこれほどの大作に大事な場面を占めるはずだったが、心の痛み

が阻んだ。父はおまえの墜落を二度も黄金の像に描き出そうとしたが、二度とも父の手は力なく落ちた。
 『アエネーイス』六・二四—三三

ここで詩人は、ダイダロスの描いた絵柄を一つ一つ紹介しているが、扉絵にあるべきイーカロスのみが欠けていると言う。目の前の絵にまつわる欠落感がダイダロスの心中の喪失感と共鳴し、「父の手は力なく落ちた」という結びは、イーカロスの墜落が、結局、ダイダロスの技術の未熟さのせいではなかつたかという、工匠自身の痛恨の思いを窺わせる。

さて、この知らぬ者がない悲しい結末を、しかしながら、オウイディウスの描くダイダロスは飛び立つ前から予期していたように見える。というのは、

翼を作るあいだも老いた両頬は涙に濡れ、父の両手は震えた。息子に与えた口づけは、もう二度とできないはずのもの。
 『変身物語』八・二二〇—二二二

というように、これが今生の別れでもあるかのようにして飛行を始め、二人で空に上がってからも、

先に飛びながら、一緒に来れるか心配し、それはあたかも親鳥が高い巣から幼い雛を大空へ連れ出したときのように、ついてこい、と励ましながら、呪わしい技術を教える。自分の翼を動かしながらも息子の翼を振り返る。
 (同八・二二二—二二六)

と言われるからである。このような表現を奇妙に感じる人も多いかもしれない。しかし、文学的表現はつねに聴衆ないし読者の知識、感覚、想像力に働きかけるものであることを忘れてはならない。ウエル

「ギリウスは巧みに読者の想像力に訴えることでダイダロスに感情移入させ、深い悲しみを感じさせる。それに対して、オウイデイウスは、読者がダイダロスの物語を何度も繰り返し聞いてよく知っており、聞くたびに彼の悲嘆に共感した、その知識と経験そのものに訴える。読者はイーカロスが飛び立とうとするときすでに、すぐにも彼が失墜することを思い、結末に先立って不安を感じ、心配を覚える。その読者のように、オウイデイウスのダイダロスはイーカロスのことを心配している。

かくして、同じ物語でありながら、別の視点から異なる表現を与えられることで、それぞれが異質な情調を生み出している。このようなことを可能にする語りの技術は、ひよつとすると、少なくとも「誰も知らなかった技術」や「誰も知らなかった翼」を誰にでも知らしめる点で、空を飛んだダイダロスの技術にまさって驚くべきものかもしれない。そこで、このあとの第II部では、神話を語る言葉と人々と技法について述べることにする。

〔注〕

- (1) アルゴー船を指揮するイアーンソンに、金羊毛皮を取りにゆくよう命じたイオルコス（テッサリアの都）の王。